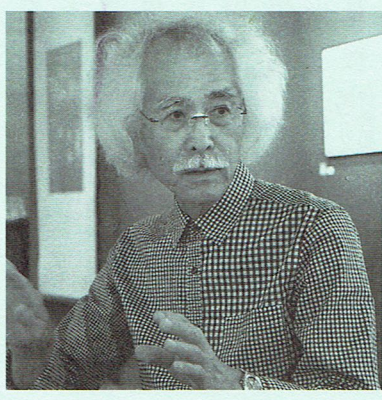


和紙 だより

目次

越前和紙への提言 三輪薫さん 1 頁
 活動紹介 PIARS 学習会 レポート 岩原正吉氏講演 2 頁
 情報欄 4 3 2 1 頁

越前和紙への提言



■三輪 薫(みわ かおる)
 1948年、岐阜県関ヶ原町生まれ。家業の日本の伝統工芸塗師を継いだ後写真家に転向。日本的な作品表現や創作を模索し、「カメラで日本画や墨絵を描く」作風や「侘寂の世界」を探求し続けている。東京、名古屋、大阪など主要都市でオリジナルプリントに拘った個展を30数回開催。2003年以降、和紙にインクジェットプリンターで出力したファインプリント作品の創作も精力的に行い、10数回個展開催。本年は「このころの和いろ」展を東京銀座・札幌・大阪梅田で開催。全国組織「わの会」、フォトワークショップ「風」を主宰。
<http://miwa-kaoru.main.jp/>

■三輪薫さん(写真家) 「独自の和紙プリントを追求」

●三輪薫の作風・色を求めて
 僕が写真学校卒業後、プロを目指して東京へ出て来たのは一九七三年。フォトジャーナリズム全盛の時代で、ベトナム戦争や水俣の写真などは皆さんの記憶に残っていると思います。一方で写真家個人の表現として映像を追求する芸術写真の分野も広がってきた。写真家が次第にコマース写真などで生活できるようになつてきた時期でもありました。

東京で、商業写真も撮るが、自分の世界観を哲学的な作風で表現している写真家、吉田昭二氏に弟子入りし、そこでコマース写真の撮影テクニックを習得しました。二年後フリーとなり、一九七六年初めての個展を銀座で開きました。その時の作品は海辺にテトラポットが並んでいたりと、畦道近くのガードレール傍に草が生えているといった、たわいない風景写真です。一瞬時間が止まったような、懐かしいような、架空の世界のようなワンシーンを描いたモノクロ写真で、いわば僕の心象風景でした。僕は「日本人には日本人特有の色の感じ方、光の読み方がある」と思い、微妙な色合いの機微を表現する日本画や墨絵に近い世界をカメラで描くのを求めてきた。ガチガチに組み立てられたものではなく、ふつと気がぬけるような遊びや「間」があるが、その中にもリンと張り詰めた空気感や気配が漂っているような世界です。

●プリントへのこだわり
 現在、個展をメインに作品を発表していますが、

版画家のように作品の実物を買って頂ける写真家になりたかったからです。オリジナルプリントの作品は、気軽に買えるポスターなどと比べると高額ですが、身近でもっと観続けたい、永く飾って観て楽しみたいと判断して買って下さるわけですから、写されたものだけでなく、実物写真の最終的な出来上がりや作品の独自性を決めると考えています。つまり、豊かな階調再現や理想的なサイズというものがあり、それがプリントにはうるさいほど注文を付ける理由です。

最初は銘柄によるフィルムの特性と光との関係や時間帯による被写体の色の変化などがよくわからず、いつも色温度を計るカラーメーターを持ち歩きました。被写体の条件が変わっても逆算して、イメージする最終プリントに表現できるように、テクニクをデータ化していき、「三輪薫の色」を作り上げていきました。

このこだわりが顕著に現れたのが、二〇〇一年の「風色」という個展です。プロラボに詰めて、しつこく何回も焼き直しをしてもらって、注文の仕方が普通の人と違っていたようです。多くの人は、紅葉だつたらもつと鮮やかにと言いますが、僕はもうちよつと優しい色で、と逆の事を言うものだから最初は思うように



和紙プリントの行灯仕様作品 (個展「風香」2003年、エアソンビエゾグラフィギャラリー京都)



個展「花道遙-II」(2007年、キヤノンギャラリー銀座)

いかなかった。苦勞しがいがあり十一銘柄のフィルムを使いこなした素晴らしいプリントができました。プリントのラボや額装、用紙メーカーも僕は共同制作者として全て公開しています。各々のプロとしての責任を負って欲しいとの思いもあるからです。

●和紙プリントの可能性を切り拓く

二〇〇〇年頃からインクジェットプリンターの精度が飛躍的に良くなつてきたのと期を同じくして、長年お付き合いのあった伊勢和紙の中北社長との縁から、僕の思い描く「写真で日本画を描く」世界、長期保存にも耐える和紙プリントへの道が開いたので、二〇〇三年の「風香」では、伊勢和紙、越前和紙に質の高いエプソンピエゾグラフの技法で和紙の風合いを十分生かした本格的な和紙プリント作品を展示しました。

インクジェットプリンターでの和紙プリントは、和紙の素材によってインクの載り方、彩度やコントラストが違って見えます。また、表面の質感にも違いが出ます。和紙は表だけではなく裏にもプリントできますが、同じ銘柄の和紙でも表裏から結構違いが出て、透過光を利用する事もでき、表現に多様性があります。展示方法も、作画と表現にふさわしいように、木目板

■第二十二回 PIARAS 学習会「和紙のお買い物ワークショップ」

和紙の消費を盛り上げようと言われて久しい。NPO法人「手漉き和紙を普及する会」PIARAS は、去る七月九日、和紙を使いたいと思っても、どうやって買つていいかわからないという人を対象に、体験型の講習会を東京日本橋の小津和紙で開催した。講師には、元女子美術大学講師で、「河鍋晩斎」の研究・下絵と画稿の修復、本の装丁・装画、打ち紙の研究のかたわら、和紙の伝承にも力を注ぐ大柳久栄氏を迎えた。



透過光で違った表情を見せる和紙プリント(2012年水の抄)伊勢和紙ギャラー

貼り、長尺の和紙を吊した掛け軸風、桜材額装、行灯仕様などに仕上げました。こちらの難しい要求にも応えてくれるので、主に伊勢和紙の機械抄きや手漉きを使っています。「花」の個展では、プリントした和紙の上に細い繊維を絵柄に合わせて載せてもらい、他の個展では凹凸のある繊維の流れや模様のある落水仕様の和紙を十種類くらい作つてもらつてその上にプリントしました。



繊維入り落水仕様の和紙(重ね漉き落水「瑞雨」部分)

和紙プリントをやっている方はだいぶ増えてきましたが、よく質問されるのは、和紙は特殊でプリントできないと思つている方が多いこと。それと機械が壊れるのではないかと心配、和紙は高いなどです。しかし一番大きいのは、和紙でプリントしたいという気持ちが強いかどうかの話ではないでしょうか？僕の実物作品を観た方は、和紙プリントの魅力に取り憑かれるようですよ。(笑)

和紙の消費を盛り上げようと言われて久しい。NPO法人「手漉き和紙を普及する会」PIARAS は、去る七月九日、和紙を使いたいと思っても、どうやって買つていいかわからないという人を対象に、体験型の講習会を東京日本橋の小津和紙で開催した。講師には、元女子美術大学講師で、「河鍋晩斎」の研究・下絵と画稿の修復、本の装丁・装画、打ち紙の研究のかたわら、和紙の伝承にも力を注ぐ大柳久栄氏を迎えた。

●なぜ、和紙のお買い物講習会が必要な時代なのか？
大柳氏はまず、なぜこのような講習会が必要な時代であるのかを考えるため、現存する中国の世界最古の紙の話から、日本への伝来、奈良正倉院文書、唐様の文化から平安時代の和様の文化の開花と和紙、トロアオイの使用、干し板製作技術の発展が和紙にもたらした影響、江戸時代の爆発的な紙の普及、生活用品に紙を使う工夫など、多岐に渡つて簡潔に和紙の歴史を辿つた。



講師の大柳久栄氏

れまで和紙で作つていたものもこれらの素材に置き換えられてしまひ、時代は大量生産時代に呑み込まれていく。

と文化を支える基底材で、日本人は書写用だけでなく様々なものに利用していた。文化の盛んな所には必ず和紙の産地があり、私達はその紙があつたからこそ、奈良や平安時代の絵巻や文物を見ることができていたのです。昨年、和紙がユネスコ無形文化遺産に登録されましたが、いい紙を漉いても、売れなければ紙漉きさんの生活は成り立ちません。いい紙を使う人が出て来ないといけませんし、途切れてしまった和紙の文化を見直し、お互いに伝え合い、又、紙漉きさんにこんな紙を作つてください、和紙でこんなものを作りました、と言えるような環境にしていく事が必要です。是非、今日から皆さんも和紙購入のリーダーになつていただきたい」と大柳氏は語つた。

●売り場でお買い物
第二部、参加者は用意した売り場のマップを片手に、実際に売り場を見て回る。「わからないことは何でも店員さんに聞きまくってください」と、大柳さんは

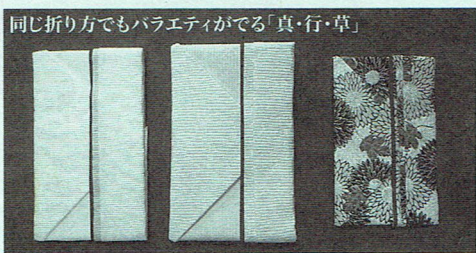


説明を受けながら小津和紙店内を巡つてみる

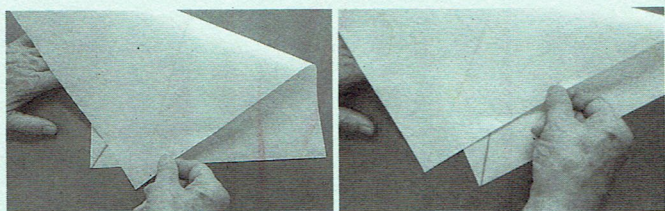
あちこちを案内して回る。書道用紙コーナーには、じみや墨、筆運び、かすれの具合等を試すことのできるテストコーナーが設けられている。揉み紙のコーナーには、コンニャク糊も販売されており、これを塗ると強さと柔らかさを兼ね備えた「強制紙」になる。漆を使う漆芸家にはなくてはならない「漆濾紙」。版画用紙、唐紙、様々な創作紙、プリンター用和紙、和紙加工品など、参加者は見たこともない和紙に出会つたり、専門家用和紙の値段の高さに驚いたりしながら店中を巡り、本講習会の特典として、小津和紙のご好意でいただいた割引券で和紙を買い求めた人もいた。

●和紙を生活に取り入れる時のちよつとしたコツ

第三部は再び教室に戻り、簡単な和紙包みを作つてみる。紹介したのは、簡単折り紙のポチ袋、半紙の残葉包み、懐紙の気軽な使い方。小さな真四角の千代紙を三回折るだけで、ポチ袋になる包みは、色違いや材質違いの紙を組み合わせると、また違った表情になる。来客用の御菓子をお持ち帰り用に十五秒で包むことのできる残葉包み。茶道で使う懐紙も、現在ではたしなむ人も少ないので、肩の凝らないアレレンジを提案していただく。「歴史のある和紙だからと言って、構える必要はない。ちよつとした決まり事を知つていると、生活に取り入れやすくなる」と



同じ折り方でもバラエティがでる「真・行・草」

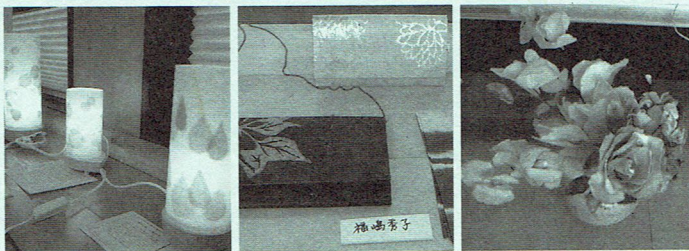


包み紙の重ね方で、吉・凶を表すことができる

大柳さんは言う。例えば、「吉と凶」「真・行・草」。半紙をほぼ対角線に折る場合、その重ね方の違いだけで、慶事用の「吉」、仏事用の「凶」を表すことができる。又、同じ折り方や包み方でも素材や色を変える事によつて、「真・行・草」、フォーマルなもの・普通のもの・くだけたもののバラエティを出す事ができる。ちよつとしたコツで自分なりに工夫し始めると、和紙に触れる楽

しみも倍増し、このような知識はコミュニケーションのネタにもなる。会場にはPIRASが教えている和紙花をはじめ、和紙作家の作品(照明器具、アクセサリーなど)が飾られ、二十名の参加者は和紙使用の妙に感心していた。代表の木南さんは、プログラムをいろいろ改良しながら、今後も講習会は続けていきたいと語った。

会場に飾られた和紙作家の作品



江戸中期 越前奉書荷の三都配送を追う

側面

講師：岩原正吉氏 (郷土史愛好家)

「越前和紙を愛する会」



主催の越前千年紀ロマン塾では、五月十七日江戸中期の越前奉書の商いを追った岩原正吉氏の講演会を開催した。氏は、岡本村史、越前市岩本地区吉崎家(同家は江戸中期紙布商として活躍)古文書などを基に江戸中期の越前奉書の三都(京都・大阪・江戸)への配送、紙商いの諸相について語った。氏は、始めに幕末のトピックスとして、福井藩の江戸城火事見舞い越前鳥の子紙三十万枚献上を取り上げ、その時の紙荷数と駄送馬数を推計し、どのように江戸まで送られていったかを紹介し、本論へと入った。その後、江戸中期の紙商いとその規模についてふれ、江戸時代の紙カタログ、新撰「紙鑑」を用いて越前和紙がどのようなレパートリーを有していたか、またそれらの評判はいかがであったか、更に越前和紙の紙商いの分類を示して、講演の中心テーマである越前奉書の三都への運送ルートについて述べた。

江戸期の紙需要

江戸中期の紙商いは、米、材木に次いで第三位の大きな規模と言われ、朝廷、公家、幕府、諸藩、寺社などの用途により製造・納入された御用紙「誂え物」と一般向けの「商い物」に大きく分類され、全国の和紙産地から紙が京大阪・

江戸へと送られた。

五箇村の御用紙は、「御紙屋衆」が漉屋を取り仕切り、漉いた紙は福井藩勘定所管轄の「紙会所」に持ち込まれ、産地の「仲買」「紙問屋」の手を借りて、決められた「版元」を通して、用命先へ納められた。江戸初期の「版元」には、京都の紙問屋三軒(三木権太夫、吉野屋作右衛門、山田道与)が名を連ね、紙原料の供与なども行っていた。後に、大滝村の三田村和泉、岩本村の仲買(吉左衛門、小左衛門、善左衛門、吉右衛門)がこれを担い、会所から集められた紙を買取り、紙問屋に売るといふ流れであった。京都の木村青竹の編による新撰「紙鑑」、安永六年(一七七七)には、越前の檀紙、奉書類、鳥の子、杉原紙、半切、小杉など紙が挙げられている。実に十六部類中の七部類が越前和紙のレパートリーで、高級・中級紙はほとんど越前紙だったことが伺える。

その評判は、江戸期を通じて高く、「雍州府志」(貞享元年)、「和漢三才図絵」(正徳三年)、「日本山海名物図会」(宝暦四年)、「新撰紙鑑」(安永六年)、「日本庶民生活史料修正第八巻」(「譚海」)(寛政七年)、「経済要録」(文政十年)などに記され、越前の紙が広く皆に愛され、使われていた事が示されている。

「商い物」は、江戸中期・元禄の頃になると種類も量も増加し、主に三都に送られており、うち、江戸に八割、京阪に二割送られた。

民間で使用される紙は「蔵物」(各藩が紙を専売して大阪



江戸時代の紙商い(三谷馬著「新編江戸見世屋図案」より、二〇一五年中央公論社刊)

の蔵屋敷を通じて全国に販売)や「納屋物」(なやもの)、「脇物」(わきもの)などと呼ばれた。紙商いの決済は、両替商も発達し、小切手に相当する手形決済等もが頻繁に利用された。

御用紙の運送状況

御用紙の運送は通常陸路が採られ、伝馬(てんま)と呼ばれる幕府公用運送は官用であることを示す高札(こうさつ)を付ければ、無賃で宿場などを無条件で通ることができた。



高札(絵符) 御用紙(8号より) 御用紙(和紙の里) 宿場などを無条件で通ることができた。「馬借」(馬を利用した運送業)を利用して、順次荷を載せ替える「宿次」を利用していたと推測できるが、「越前国名蹟考」

や「福井県史通史編」には、北国街道の宿場ごとに常備されている馬数が記録されており、宿場毎の常備人馬数は様々で一定でない、そのため一度に、馬を十頭以上必要とする御用紙の荷送りでは速やかに用命先に届けるため、「先触れ」をもって次の宿場へ人馬を予め用意しておくように手配していた。また、御用紙の荷は高額かつ大事なものであるため、帯刀した紙送りの責任者「宰領」が付く厳重な責任体制がとられ、御用紙の紙荷は江戸城まで一度も地上に置かれることなく、運ばれていた。

運送ルートと運送業態

時代によって配送経路は異なるが、陸上は宿次の馬借、川は川舟、湖・海は船で送られている。この時期は、同業者の間屋仲間制があり、「掟」に従って商売していたので、荷送りの自由

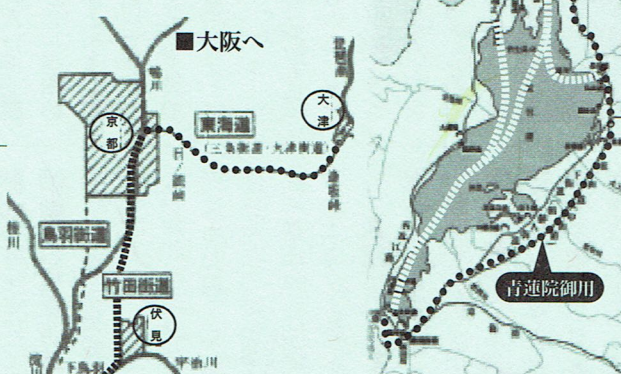
度は余りなかった。藩や幕府の商業行政は時代により変わり、規制強化と緩和のせめぎ合いであった。藩や幕府は商人に商売上の利権を保証し、業界の管理、物資流通の確保を義務付けており、行政の一端も担わせていた。

紙の流通は概ね〔産地〕生産者↓仲買↓荷積問屋・舟持↓〔集積地〕荷受問屋↓仲買・積問屋〔消費地〕他地問屋↓仲買↓小売商↓消費者となり、流通構造は確立されていた。安永四年（一七七五）の史料では、越前の紙漉き仲間は大滝に最も多く八四軒、紙の仲買人は岩本に最も多く五二軒とあり、岩本から府中（武生）の間屋に繋がり、販路に荷を送った。



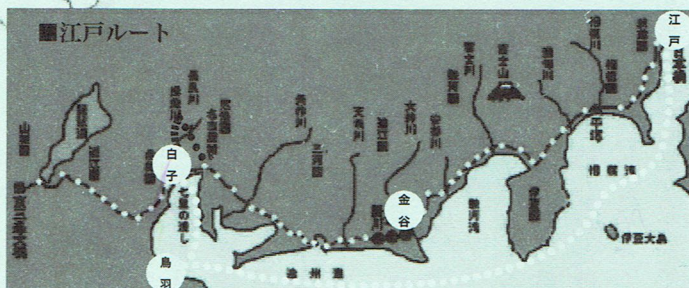
■府中馬借街道

■京阪ルート



■東西の主なルート

- 【京阪ルート】
- ・五箇村→府中→北国街道→中山道→大滝→京都・大阪
- ・五箇村→府中→府中馬借街道→河野浦→敦賀→海津→大滝→京都・大阪
- ・五箇村→府中→府中馬借街道→河野浦→敦賀→塩津→大滝→京都・大阪
- 【江戸ルート】
- ・五箇村→府中→北国街道で木之本→大垣→美濃路で名古屋→東海道を江戸
- ・五箇村→府中→木之本→大垣→揖斐川で伊勢湾の白子→海路で江戸
- ・五箇村→府中→河野浦→敦賀→塩津→長浜→大垣→揖斐川→白子→海路で江戸



■江戸ルート

川はすべて福井藩の支配地で、通行手形も必要なく便利だが、江戸初期〜中期までは殆ど使われていない。元禄十三年（一七〇〇）、五箇村の奉書荷が、日野川中流の白鬼女（鯖江市）の渡しから三国湊へ川舟により川下しされ、敦賀湊へ送られていたと訴えられ、以後禁止されている。宿次、馬借の業界の衰退を招き、迷惑であるというのが理由である。そのことを裏付ける

めくくった。れるとともに散逸することのないよう後世へ伝えるべきだ（忘却の淵に沈めないこと）と締めくくった。

記録もあり、正徳五年（一七一五）の三国湊口銭役所の記録に、入津には「楮」はあるが、出津記録の中に「紙」は出てこない。川舟が利用できるようになるまでには、相当時間がかかっていると思われる。

情報欄

●イベント情報

■第8回越前和紙七夕吹き流しコンテスト作品展

時：7月7日（木）～7月24日（日）
場所：越前市いまだて芸術館

■越前市小学校卒業証書漉き

時：7月19日（火）～8月29日（月）
場所：パピルス館

（協力：越前和紙伝統工芸士会）

■河濯さんまつり

時：8月6日（土）
場所：和紙の里通り

■ものづくり・匠の技の祭典2016

時：8月10日（水）～12日（金）
場所：東京国際フォーラム
青年部参加 体験

■おもしろフェスタ2016

時：8月6日（土）～8月7日（日）
場所：サンドーム福井（越前市）体験

■越前モノづくりフェスタ2016

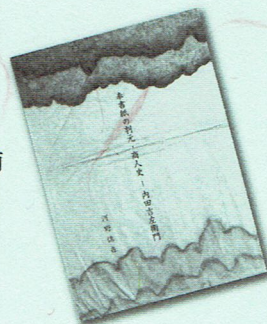
時：9月17日（土）～19日（月）
場所：サンドーム福井 展示

■平成28年越前和紙伝統工芸士認定試験

時：10月5日（水）
場所：パピルス館・各事業所

■新刊紹介

●河野徳吉著
「奉書紙の版元・商人史-内田吉左衛門」
（越前和紙を愛する会発行）
江戸期の越前和紙仲買で「商い物」の有力商人、内田吉左衛門を追った和紙流通史。
-定価：1500円
-問合せ：越前市紙の文化博物館
0778-42-0016



編集後記

江戸期の五箇村の越前和紙の紙生産・商い額は、今のお金にして100億円規模であったそう。まさに紙王国であったのだなあ。（よ）